

ジェンダーの視点から生き方を考える「とりかへばや物語」の授業

Class to Think About (How to Develop) the Attitude Toward Life
(from the Viewpoint of Gender) through Japanese Classical
Literature, “Torikaebaya story”

前 比呂子

ジェンダーの視点から生き方を考える「とりかへばや物語」の授業

Class to Think About (How to Develop) the Attitude Toward Life (from the Viewpoint of Gender) through Japanese Classical Literature, “Torikaebaya story”

基盤教育機構教授 前 比呂子

1 はじめに

本稿は「とりかへばや物語」という作品を通して、学び手が社会のあり方や自分の生き方を考える授業づくりについての報告である。自らの「生き方を考える」ことはすべての学びの目標であり、過程である。「ジェンダーの視点から」としたのは、題材とするこの作品がはっきりとジェンダーロールをめぐる登場人物たちの葛藤を描いているからである。ジェンダーの問題はSDGs17の目標の5番目に取り上げられているように、すべての人が生きる上で無縁ではいられない問題である。しかし、筆者はジェンダーの授業（ジェンダー平等ありきの授業）をしたいのではない。目指したのはこの作品の登場人物や、この作品を生み出した人々の姿を通して、学び手が広く自由に考え、自分のあり方、生き方の手がかりをみつけていくことのできる授業である。

取組みは2020年度、2021年度にわたって「国語科教育研究」の授業の中で行った。参加した学生たちがどのようにこの作品を捉え、学習者に何を考えさせようとしたのかを彼等の作成した言語活動案、筆者の提示した文献との読み比べの活動を通して紹介していきたい。

2 「とりかへばや物語」の授業

(1) 授業を行った科目

「国語科教育研究」は教職過程の教科〔国語〕の指導法に関する科目である。先行科目「国語科教育論」で国語の指導法の基本を習得した3年生以上を対象により高い授業の構想力、実践力の習得をめざす科目である。（履修人数2021年度24名、2022年度15名）。

(2) 授業で取り上げた箇所と活動内容

教材として取り上げた箇所と活動内容は以下のとおりである。

- 第1回 「父大納言の悩み」 (巻一の冒頭部分) 言語活動案の作成
 第2回 「観桜の宴」 (巻二の終盤部分) 他文献との読み比べ

取り上げた箇所には上記のように①「父大納言の悩み」、②「観桜の宴」というタイトルを施した。本文はどちらも日本古典文学全集 (小学館) によった。傍線、欄外の注、設問、省略部分の要約、辞書を引く語の指定、現代語訳、及び内容把握のためのワークシートは筆者による。

現在、わずかではあるが現行学習指導要領の古典A、古典Bに「とりかへばや物語」を掲載している教科書がある。内1社が同じ冒頭部分を取り上げている。「観桜の宴」(巻二の終盤部分)は筆者の知る限りまだ教科書に取り上げられたことはない。社会の制約にとらわれず自身の能力を発揮して自分らしく生きたいと願うヒロインの思いが強く伝わってくる部分である。

(3) 第1回 「父大納言の悩み」言語活動案の作成

【「父大納言の悩み」あらすじ】

すべてを持ち合わせ何の不满もないように見える大納言は二人の子どもたちのことで悩んでいた。内気で人見知りののはげしい若君と活発な姫君を「とりかえたい」と思う。

【活動内容】この物語を通して生徒たちに考えさせたいことをもとに言語活動案を作成する。

【事前学修】本文下段に指定した古語の意味を調べ、必要に応じて品詞分解をし、現代語訳をつけ、

◆の設問を考え、高校時代に使用していた「国語便覧」等で作品について調べておく。
 (事前提出)

とりかへばや物語

1

父大納言の悩み

いつの頃にか、権大納言にて大將かけ給へる人、御容貌・容貌・身の才・心用ゐよりはじめて、人柄・世のおぼえも、なべてならずものし給へば、何事かは飽かぬことあるべき御身ならぬに、人知れぬ御心のうちの物思はしきぞ、いとつきせざりける。

*権大納言 太政官の次官、正三位相当の要職。定員外に任ぜられた大納言を「権大納言」という。

*大將 近衛府の長官で従三位相当。

※大納言には二人の北の方があり、それぞれに姫君、若君が生まれた。ふたりは同じ屋敷内のそれぞれの母親のもとで別々に育てられたが、お顔立ちのすばらしさは瓜二つで一緒に育てられていたら取り間違えるほどであった。

いづれもやうやう大人び給ふままに、若君はあさましう物恥ちをのみし給ひて、女房などにだに、少し御前遠きには見え給ふこともなく、父の殿をもうとく恥づかしくのみ思してやうやう御文習はし、さるべき事どもも教へ聞こえ給へど、思しもかけず、ただいと恥づかしとのみ思して、御帳の内にのみ埋もれ入りつつ、絵描き、雑遊び・貝覆ひなどし給ふを、殿はいとあさましきことに思しのためはせて常にさいなみ給へば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましうつつましののみ思しつつ、ただ母上・御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの御前へも参れば、御几帳にまつは

容貌・容貌

ものす

才

心用ゐ

おぼえ

◆1何事かは飽かぬことあるべき御身とはどのようなことか？

やうやう
あさまし

うとし

文漢籍

聞こゆ

さいなむ

◆2さいなみ給へばとは、どのように叱つていたのだろうか

つつまし

乳母

れて、恥づかしいみじとのみ思したるを、いとめづらかなることに思し嘆くに、また、姫君は、今よりいとさがなくて、をさをさ内にもものし給はず、外にのみつとおはして、若き男ども・童べなど、鞠・小弓などをのみもて遊び給ふ。御出居にも、人々参りて文作り、笛吹き、歌謡ひなどするにも走り出で給ひて、もろともに、人を教へ聞こえぬ琴笛の音もいみじう吹き立て弾き鳴らし給ふ。ものうち誦し、歌うたひなどし給ふを、参り給ふ殿上人・上達部などは、めでうつくしみ聞こえつつ、かたへは教へ奉りて、「この御腹のをは姫君と聞こえしは餅事なりけり」などぞ、皆思ひあへる。殿の見合ひ給へる折りこそ、取りとどめても隠し給へ、人々の参るには、客人にあらため殿がお着替えをなさる間、殿の御装束などし給ふほど、まづ走り出で給ひて、かく馴れ遊び給へば、なかなかえ制し聞こえ給はねば、ただ若君とのみ思ひてもて興じうつくしみ聞こえ合へるを、さ思はせてのみものし給ふ。御心のうちにぞ、いとあさましく、返す返す、とりかへばやと思されける。

いみじ
さがなし
をさをさ
出居客間
殿上人
上達部
うつくしむ
餅事

◆3「さ思はせて」のこととは何を指すか。

【事前学修を終えての学生たちの作品観】

- ① 男子も女子もしたいことができずに、することを決められているのはとても窮屈で可哀そうだと思った。いつの時代でも活発な女子やおとなしい男子はいると思うので、当時は我慢や苦労が多かったと思う。今の時代、ジェンダーの問題が取り上げられることが多い中で、男子＝○や女子＝○○といった固定観念を取り払う必要があるという意味でも、今だからこそ注目すべき作品ではないかと感じた。
- ② 「入れ替わってくれたらなあ」と父が思い悩む姿に、それぞれの才能を性別のせいで活かすことができない職業選択の不自由さ、男女の性差に対する壁の分厚さを垣間見ることができる。しかし、この作品には良い部分もある。父親は、性別で悩んでいるだけであり、この二人の性格や能力を認めている節があるのだ。周りの人々がこの二人を否定せず、認めて育てている。このおかげで、彼等は自分たちの個性を伸ばすことができている。この作品は、現代のサブカルチャーに劣らない物凄くとがった作品である。ジェンダー問題、政治問題、お父さんの子育て苦労などなど今でもみられる問題が描かれている一方、女装男装、入れ替わり、完璧なお父さん像とその裏側、といった漫画的アニメ的要素が沢山つまっている。だからこそ、ただ難しい古文ではなく考えさせられる面白い作品として今でも取り上げられるのだろう。
- ③ 大納言の立場に立つと、自分は全てのものを手に入れたのに、自分の子どもは思い通りにいかない歯がゆさに共感できた。現代であれば、LGBT等への世間の認識が広がっているため受け入れられやすいが、この時代で考えると受け入れられるはずがないし、頭を抱えるほどの大きな悩みの種だったと考えられる。

この作品が生まれた平安時代末期も、女性は女性の男性は男性の生きづらさ・苦しさを感

ていたのだろうか。この作品は自由に生きたいという意志の表れなのだろうか。

(②③の下線は筆者による)

①はジェンダーロールに縛られる子どもたちの不自由さ、窮屈さに感情移入し、この作品が今も残る「固定観念を取り払う」意味で注目すべき作品だと述べている。多く見られた代表的な感想である。一方②や③のように父親のあり方に着目し、苦悩や葛藤への共感や感情移入を示すものも多かった。授業で取り上げた冒頭部分では二人の主人公はまだ幼児期を脱した程度の年齢^{*1}であるため、「あさましうもの恥ぢをのみしたまふ」若君、「はなばなとほこりか」「いとさがなくて」という姫君が、多少の咎め立ては受けているものの、それぞれの性格や好みのままに行動(遊び)を続けている状態である。悩む父親への共感、この時点でもっとも苦悩・葛藤するのが、性規範を含めて当時の社会にもっともよく適合して生きている(出世を遂げている)「全てのものを手に入れた」かに見える父大納言であることを学生たちが感じ取っているからであろう。加えて、②は「父親は性別で悩んでいるだけであり、この二人の性格や能力を認めている節がある」こと、「周りの人」が二人のあり方を「否定せず」育てていることを看過している。当時の貴族階級の父親は現在以上に子どもの教育に関わっていたと思われるが、北の方たち(二人は異母兄妹である)、二人に仕える女房たちはより身近で子育てを担っているものであり、彼らの思いを抜きにこの育て方は成立しなかったであろう。これら父親と「周りの人々」の子育てへの着目も後の言語活動案に反映されていく。

【学生たちの言語活動案】

傾向としては脚本化や劇作りといった活動案1に代表されるタイプがやや多かったが、全体的に発想や手法がバラエティに富んでいた。また、本稿には挙げていないが、国語という教科の枠を越え、ふだん自分たちが感じているジェンダー課題に関する活動(アンケート調査、「自分らしさ」のマインドマップづくり等々)や、映画「君の名は」など他メディアとの比較に関する活動が見られたのもこの作品のテーマの持つ普遍性によるものであろう。

多くの学生たちが活動の振返りで「同じ題材でも切り取るところが人によって全然違ったし、どんなことを考えさせるのかということも違って、いろいろな視点から見るができるんだと思った。」と綴っているが、多様な切り口が存在するのは、それぞれが自身の個人的な経験や問題意識を重ね合わすことのできるさまざまな題材をこの作品が随所に持っているからに他ならない。

以下にその言語活動案を紹介する。活動案については、本人たちが考えたねらい(○印)と活動の概略のみを記す。

活動案1 エピソードの制作と寸劇による発表

○性別をめぐる当時の価値観を感じ取り、現在に生きる自分たちの価値観を問い直す。

- ① 本文には、若君と姫君の性格や好みの遊びなどは描かれているが、セリフやエピソードはないので、本文からの情報を基にこの状況から起こりそうなエピソードを考える。
- ② 班になってそれぞれが持ち寄ったエピソードの中からよいものを選び、1つの寸劇に仕上げ、班の中で配役を決めて演じてみる。
- ③ 全体の前で班ごとに寸劇を発表し、制作の意図や感想などを交換し合う。

活動案2 「遊び」から考える男女の生き方の制約

○父大納言が求めている理想の男女のあり方を本文中の「遊び」の規定から考える。

- ① 本文中にはたくさんの種類の「遊び」が出てくる。その遊びをすべて抜き出し、それぞれが男女のどちらの遊びに属するのかを表にする。
例 絵描き、雛遊び、貝覆ひ、鞠、小弓、笛…
- ② それらがなぜ「男の子の遊び」、「女の子の遊び」に類別されるのか、その理由を考える。同時に遊びを通して求められていた男女のあり方についても考え、発表する。
- ③ 現在にも同じようなこと（性別により好みや行動に制約を受ける、可能性が狭められる）がないか、身近な例から考えて発表する。

活動案3 登場人物にインタビュー「実際はどう思っているの？」

○記者と登場人物になりきることで、本文に書かれていることをもとに登場人物の置かれている状況や心情を自由に想像させる。

- ① まず全員が若君、姫君、父大納言の3人にしたい質問をそれぞれに1つずつ考える。
- ② 次に全員が若君班2、姫君班2、父大納言班2の6つの班に分かれ、寄せられた質問への回答を班で考える。
- ③ その後、若君班2、姫君班2、父大納言班2の代表6名が前に出て、記者会見のような形で質問を受ける。それ以外の人は記者となって自分の属していた班以外の若君、姫君、父大納言に質問をする。
- ④ 会見後、登場人物たちからの回答を通して得た気づきや考えた事を紙に書いて提出し、授業者がまとめて全体で共有する。

活動案4 「自分の価値観が人を傷つけていないか？」について考える。

○自分たちがふだん持っている先入観をこの作品を通して疑い、自分の価値観からくる言動や行動が他人に及ぼす影響について考える。

- ① 若君の好みや性格に対して涙をこぼさせるほど叱る父大納言の気持ちを考える。
- ② 父大納言の「男らしさの価値観」を押し付けられた若君の気持ちを考える。

- ③ 自分たちの普段の言動の中にも父大納言のようなことがないか振り返る。
 - ④ 自分の価値観からくる言動で他人を傷つけないためには、何に気をつけたらよいかについて考える。
- (①～④について班で話し合い、出た意見を全体場で発表しあう)

活動案5 父大納言に出す報告書—二人の教育係を任されたら

○教育係を任されたとして自分ならどのような教育をするのか、二人への接し方も含めて自由に考える。

- ① 父大納言に提出する報告書といった形で一日ごとの教育目標と教育内容、その教育を受けた二人の反応や変化を記入する。
- ② ペアになって、教育係役の生徒が報告書の内容を伝え、父大納言役の生徒は聞いた報告について疑問や意見を述べる。役割を交代して繰り返す。
- ③ 自分の作成した報告書とペアワークを通して考えたことを記入し、全体に発表して共有する。

活動後半の〈意見交換・共有・気づきと変容〉の部分で用いている手法から大別すると、活動案1、3、5は、ロールプレイング型、活動案2、4はディスカッション型と言える。また、テーマ設定から見ると、活動案1、活動案3は、登場人物たちの心情や葛藤を自由に創造または想像し、次に「なりきる」ことを通して他者の考えにも触れながら思考を深める活動、それに対して活動案2、活動案4、活動案5はそれぞれ「遊びとジェンダー」、「価値観押しつけの問題」、「父大納言の子育てへの提言」という授業者から提示されたテーマについて討論などを通して思考を深める活動である。

後者には作成者の抱く問題意識や体験が反映されやすい。活動案2はこの作品ならではの重要な観点であるが、作成者の女子学生は「私も幼いころはプリキュアより戦隊ものが好きだった。」と語っている。同様に、活動案4の作成者は男子学生であるが、「(若君に)涙をこぼさせるほど叱る父大納言」「男らしさの価値観を押し付けられた若君」という両者の胸の痛くなるような場면을切り取って「価値観の押しつけ」をどう回避すべきかについて考えさせようとしている。また、先述したように活動案5には父大納言の子育てをめぐる葛藤への着目が反映されている。筆者は最初、これらの案(他にもこれに類するものとして「父大納言を説得しよう」などの活動案がある)を非現実的な設定と見てしまっていたが、学生たちが看過したとおり、実際にはこの言語活動に近いことが「教育係」(女房たち)によって日々行われ、それが父大納言の教育方針に少なからぬ影響を与えていたこともありうることに気づかされた。(学生たちが読んでいるのは第1回の授業ではこの冒頭部分だけであるが、)物語はその後、父大納言や「周りの人々」の容認(消極的な後押し)によって性を違えたままの元服・裳着、任官や結婚へと突き進んでいくのである。

それぞれの「切り口」にそれを生かす手法を用いながら、学び手が登場人物とともに痛み、悩み、共感し、参加しながら自らの生き方、あり方をも考えていくことのできる言語活動案が多数作成されていた。

最後に、これら言語活動案の実施に際しては、教室内の1人ひとりの生徒たちにとって非常にセンシティブな内容を含むものであることから、特に言語活動案1、3などロールプレイング型の「演じる」活動においては、生徒たちの状況に配慮し、真剣な雰囲気の中で行われるようにすることが指導者の大きな役割となることを明記しておきたい。

(4) 第2回 「観桜の宴」他の文献との読み比べ

「観桜の宴」あらすじ

宮中観桜の宴において19歳になった中納言（女）は、漢詩、舞、笛、あらゆる分野で圧倒的な才能を披露し、並み居る人々の賞賛を浴びる。官僚として帝の厚い信頼を得、自己の持てる能力を存分に発揮して、完璧に輝いている中納言（女）の姿が満開の桜の中に描かれる場面である。かつて「とりかへばや」と嘆いた父、左大臣も観桜の宴での娘の活躍に「かくても、げにいとようありぬべきことにこそありけれ」と二人のあり方を容認してきた自分の子育てをうれし涙の中で肯定する。しかし、実はこの時中納言（女）は友人であった宰相の中将の子を妊娠しており出産のためにすべての栄光を捨てて失踪しなければならない身であった。自分の能力を発揮して生きることのできないヒロインの悲しみが（笛は男の楽器なので）「または吹きたつべきかは」（二度と吹きたてることはあるまい）と思って吹き鳴らす笛の音のぞっとするほどの美しさに象徴的に重ねられていく。

【活動内容】同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする。^{*2}

比較する文献 1「紫式部日記」「枕草子」 2「わたしはマララ」^{*3}

【事前学修】②「観桜の宴」を読み、ワークシートの問題をしておく。

【留意点】読み比べに入る前に、ワークシートの設問を用いて②「観桜の宴」の内容を確認する。文中の「中納言」「大臣」が誰のことなのか、若君（女）がどのような成長を遂げているのかについて押さえる。その後、①「父大納言の悩み」から②「観桜の宴」までに起こったできごとを年表にして示し、若君（女）、姫君（男）が今抱えている問題を理解させる。

2 観桜の宴

中納言は十九歳になった。その年の三月一日頃、それは桜がいつもよりも早く咲いた年であったが、帝は南殿で桜の宴を催した。その道の博士たちも呼ばれ、人々は当日になって題を賜り、漢詩を作った。

世にある限りのそれぞれの道の博士たちを召して、今回は特別の催しとして、世にありとある道々の博士ども召して、いみじかるべき度のことと、心を

尽くす。当日になって、題を賜って漢詩を作ったと云う。中納言が作り出した詩は

へる、すぐれて、名を得たる博士と言へども作り及ぶなかりけり。「この世には

さらにも言はず、唐土にもかかる類なかりけり」と上をはじめてまつり誦

じのしりて御前に召して、さるべき人々をさしわけ、御衣脱ぎてかづけさ

せたまふ。下りて景色ばかり舞踏したまふ容貌、用意、有様、いつもよりもす

ぐれてめでたく、一覽せらる。花のほひもけおさるるやうなるを、見る人涙を

落とす。まして、父大臣は、あはれ、かくありけるものを、わが思ひ嘆きしよ、

大方は、誰かは知る人のありける、かくても、げにいとようありぬべきことに

こそありけれ、と見たまふ。御喜びの涙、ましてことわりなりや。右の大殿、

はたささらにも言はず。二所の御心のうちのうれしき劣り勝らざりけり。暮れゆく

ままだに御遊びが始まるに、中納言、または吹きたつべきかはと思せば、折々の御遊び

にしがり隠したる音を心に入れて吹き立てたる、雲居を分け響きのぼり、そぞろ

寒くおもしろきこと言うはん方なし。

とりかへばや物語 桜花の宴 ワークシート

◇傍線部「さるべき人々」を指す語を文中より、七文字で抜き出しなさい。

◇傍線部「花のほひもけおさるるやう」とは誰のどのような姿か。

「」の「」な姿

◇傍線部「誰かは知る人のありける」(誰が真実を知っているというのだろうか)の真実とは何か?

◇傍線部「涙」とは誰の何に対する涙か?

◇傍線部「かくても、げにいとようありぬべきことにこそありけれ」とは、誰が何をしたいと言っているのか?

◇傍線部「または吹きたつべきかはと思せば、折々の御遊びにしがり隠したる音を心に入れて吹き立てたる」とあるが、二度と笛をふけないのはなぜか?

☆整理してみよう

一 中納言はどのような人物として描かれているか?

また、中納言とは「父大臣の悩み」に登場する人物の内、誰のことか。

二 中納言の父はどのようなことに心を悩ましていたのだろうか?

三 そして今は、どのように思っているのだろうか?

次に事前学修後の学生たちの感想を挙げる。

【「観桜の宴」学生たちの感想より】

- ① 姫君、若君はトランスジェンダーではないので、それぞれのきっかけによって性別を偽装しなくてよかったのは良いことだと思う。しかし、性別を偽装しないことは当時で言えば姫君、若君の好きなこと、自由が奪われるということでもある。

- ② 女性の姿のままでも、得意なものを極めることが許される世の中であつたら、才能をもっと咲かせることが出来たのにと強く感じた。
- ③ 若君（女）は自身が妊娠していることで笛を吹くことはもうないだろうと思っている箇所を読み、悲しい気持ちになった。
- ④ 情景描写がとても上手で、桜の下の宴が目につかびました。これもそれも、父と娘の感情が文章によく表れているからだと思います。このお話は、性差についてとても考えられるものになっています。性別関係なく能力があれば、出世することができる。しかし、女性は、妊娠という「女性」しかできないことが、大きな障害となってしまう。現在でも、女性は「妊娠するから責任ある役職に就けない」とか、「妊娠して休職したら、クビにされる」とか、とりかへばや物語の若君（姫）のようになっている。妊娠という人間として必要な行為が、社会に出るための障害となっている。

（①④の下線は筆者による）

この物語における性の偽装（異性装）の意味を捉えた①、それをしなければ自分の才能を活かせない、自分らしく生きることのできない不自由さに言及した②③のような感想が多く見られた。また、④のように仕事と妊娠についての現在の女性の状況と重ね合わせる感想も見られた。

枕草子 二十二段 すさまじきもの

すさまじきもの ひるほゆる犬、春の綱代。三四月の紅梅の衣。ちこの亡くなりたる産屋、火おこさぬ火桶。地火炉。牛死にたる牛飼。博士のうちつぎ女子うませたる。

比較文獻 1

崇徳朝日記 「日本紀の御局」のエピソード

崇徳朝は源氏物語を読んだ一条天皇から「あの難しい日本書紀をお読みになつていらっしゃるだね。ほんとうに字識があるらしい」と褒められたことを妬んだ同僚の左衛門の内侍から「日本紀の御局」というあだ名をつけて揶揄されたことを記しています。

内の上の、源氏の物語、人に読ませひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし。」とのたまはせけるを、（左衛門の内侍という人が）ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある。」と、殿上人などに言ひ散らして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてたに（漢語を読むことを嫌つて、いまだに、宮中のようなところでどうして字問をひけたりするでしょうか。つつみはべるものを、さる所にてささかし出ではべらむよ。

その続きに少女時代の次のようなエピソードも綴っています。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人は遅う読み取り、忘るるところをも、あやしきまでぞさくはべりしかば、書に心入れたる親は、「くちをしろ、男子にて持たらぬこそ、幸ひなかりけれ。」とぞ、常に嘆かれはべりし。

家の式部の丞といふ人が、まだ子供のころに漢籍を読んでいたとき、私はそれをそばでいつも聞き習って、弟が読み覚えるのに手間取ったり忘れたりするようなところでも、私は不思議なほど早く理解したので、学問に気を入れていた父親は、「残念なことに、この娘が男の子でなかったのは、ほんとうに幸せがなかったのだ」といつも嘆いておられました。

※崇徳朝の父、藤原為時が高名な漢詩人

崇徳朝日記 「日本紀の御局」のエピソード

崇徳朝は源氏物語を読んだ一条天皇から「あの難しい日本書紀をお読みになつていらっしゃるだね。ほんとうに字識があるらしい」と褒められたことを妬んだ同僚の左衛門の内侍から「日本紀の御局」というあだ名をつけて揶揄されたことを記しています。

内の上の、源氏の物語、人に読ませひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし。」とのたまはせけるを、（左衛門の内侍という人が）ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある。」と、殿上人などに言ひ散らして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてたに（漢語を読むことを嫌つて、いまだに、宮中のようなところでどうして字問をひけたりするでしょうか。つつみはべるものを、さる所にてささかし出ではべらむよ。

その続きに少女時代の次のようなエピソードも綴っています。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人は遅う読み取り、忘るるところをも、あやしきまでぞさくはべりしかば、書に心入れたる親は、「くちをしろ、男子にて持たらぬこそ、幸ひなかりけれ。」とぞ、常に嘆かれはべりし。

家の式部の丞といふ人が、まだ子供のころに漢籍を読んでいたとき、私はそれをそばでいつも聞き習って、弟が読み覚えるのに手間取ったり忘れたりするようなところでも、私は不思議なほど早く理解したので、学問に気を入れていた父親は、「残念なことに、この娘が男の子でなかったのは、ほんとうに幸せがなかったのだ」といつも嘆いておられました。

※崇徳朝の父、藤原為時が高名な漢詩人

次に比較文献を読んだ学生の感想を挙げる。

【比較文献を読んで】

- ① 比較文献1を読むことで、この作品の見方がかなり変わった。ただの一つの家族の悩みだと思っていたが、背景を知ることではたたくさんの同じような家族がいることがわかって、内容も捉えやすくなった。
- ② 娘の方が漢籍の理解が早く、息子の方が手間取るようなきょうだいの父親が少なからずおり、それについて嘆いていたという背景の中で作られたということを知り、この物語の作者の才能がすごいと思った。
- ③ 比較文献1を読んで、今までは紫式部は漢籍を読むことができる優れた人物としか考えておらず、その才能は他人から賞賛されているものだと思っていたが、「日本紀の御局」と揶揄されていたことを知り、周囲からそのような目で見られていたことに驚いた。この文献からも当時の「男がやること」「女がやること」の区切りがはっきりしている文化が読み取れた。しかし、そのような文化であったからこそよけい紫式部の偉大さも感じた。
- ④ 紫式部日記は、逆に考えれば、女性であるからこそ、源氏物語を書き、多くの人に読まれることとなったと捉えることも出来ます。生まれた社会の規則やルール、常識の中で、自分の出来ることを見つけることが出来るのも、人間の素晴らしい部分だと思います。
- ⑤ マララと中納言は、立場は違うが、悩んでいることは同じである。
- ⑥ 比較文献2を読むことで、時代も国も全く違う事例であることから、ジェンダーの問題は、世界中のどんな場所でも、どの時代でも起こっている問題であるということが分かった。マララさんの撃たれた理由や状況を知ること、当たり前で主張しているだけで命を奪われかけてしまう地域があることの怖さと、日本の平和さを感じた。また、とりかへばや物語を読んだ時よりもさらに性別によって自由がなくなることの不条理さを感じ、この教材を取り扱う際には、必ず比較させた方が良いと思った。
- ⑦ 比較文献2を読み、現代でも性別による差別は無くなっていないということを改めて感じさせられた。マララさんの祖国であるパキスタンでは女性が職に就くことすら珍しいという記述があり、男女差別の深刻さを感じた。そんなパキスタンにおいて、女性の権利を訴える活動をすることは非常に勇気のいる行動であるし、自分の身の危険をさしおいてまで活動していたことは賞賛されるべきことである。日本はパキスタンほど差別が顕在化していないが、政治家などはまだまだ男性の方が多いし、その点、パキスタンと共通する部分はある。表立って見えなくても心の中での差別意識は日本人にもまだまだ残っているのではないかと考えた。

(①②⑥の下線は筆者による)

感想①②は、紫式部日記や枕草子の記述から、この物語が「ただ一つの家族の悩み」ではなく、

その背後には「実はたくさんの同じような家族がいる」ことへの気づきである。「この物語の作者の才能がすごいと思った。」ということばには、奇想天外に見える物語の登場人物たちに、ふつうに見える人々の悩みや生きづらさを投影させていく作者の創作力へのリスペクトが感じられる。

また、③④は更に発展させて、性規範による生きづらさを抱えながらそれを文学へと昇華させていった紫式部の「偉大さ」に言及している。

読み比べは新学習指導要領の言語文化、文学国語、古典探求で、更に強化が望まれる指導事項であり、大学共通テストの出題にも定着しつつある。間違いなく作品の読みを深め、学びの世界を広げる効果が大きいが、比較文献の選び方によってポイントがずれたり、比較のための比較に終わってしまう懸念もある。指導者自身に国語という教科内だけの知識に止まらない広い識見が求められるようになるであろう。

筆者は、はじめ比較文献①（紫式部日記、枕草子）に加え、比較文献②（現在の文献）には、女性の進学や就労に関するデータや関連する新聞記事を考えていた。「わたしはマララ」は、地理的にも宗教的にも文化的にもあまりにもかけ離れた国のできごとと受け取られないかと思ったからである。しかし、逡巡しながらも作品の力に惹きつけられ「わたしはマララ」を選択した。結果的にこの教材に対する学生たちの食いつきは非常によかった。感想は⑤⑥⑦とその一部しか載せられなかったが「ジェンダーの問題は、世界中のどんな場所でも、どの時代でも起こっている問題である」こと、すぐれた作品は千年以上の時も、何千キロの距離も越えて響き合うことを改めて学生たちと共に実感した。

3 高等学校学習指導要領改訂の趣旨と教材としての「とりかへばや物語」の可能性

2022年4月より高等学校の新学習指導要領が年次進行で実施される。今回、科目編成を伴う大変更となった〔国語〕については、その改訂の趣旨として「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている」ことが挙げられている（「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編」改訂の趣旨及び要点）（下線は筆者による）。

今回の改訂の軸は学習法、授業法にある。問われているのは、これからの社会を生きる学び手たちが、自分の生き方、あり方と関連づけて考えることのできるような授業法の改善であり、それに応えることのできる教材の発掘・開発（読み比べ、比較教材を含む）である。その点で、ジェンダーという現代に通じる課題を含む「とりかへばや物語」は、現代語訳で完結する（＝教材への依存度の高い）従来型の古典の授業の壁を越え「思考力、判断力、表現力」を存分に引き出すことの

できる教材のひとつと言えよう。

新学習指導要領の趣旨にあることばを借りれば、本稿は「教材への依存」を脱し、「文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用」しながら、「多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現する」「言語活動」を通して、「古典に対する学習意欲の低さ」の問題を克服しつつ、他者と関わり、実社会を生きる力をつける授業づくりを「とりかへばや物語」という好適の教材を通じて試みた授業例の報告である。新たな古典授業への叩き台のひとつとして、お読みいただけたならば幸いである。

- * 1 この後に「やうやう十にも余りたまへどなほ同じさまなるを」という記述がある)、
- * 2 高等学校学習指導要領 第2章第1節国語 第6 古典探求 2 内容〔思考力・判断力・表現力等〕A 読むこと(2)のイによる
- * 3 「わたしはマララ」(マララ・ユスフザイ、金原瑞人)より抜粋

参考文献

- ・「住吉物語・とりかへばや物語」新編古典文学全集 石野敬子・三角洋一
- ・「とりかへばや物語論に見る「退廃性」の正体－「とりかへばや物語」教材化に向けての一考察－」前比呂子 追手門学院大学一貫連携教育研究所紀要第2号2016年3月
- ・高等学校学習指導要領(平成30年告示)
- ・高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編
- ・「わたしはマララ」(マララ・ユスフザイ、金原瑞人)